

報告

碎葉鎮城と大雲寺の瓦

櫛原 功 一※

※ 帝京大学文化財研究所

はじめに

Ⅰ. シャフリスタン2の唐代瓦

Ⅱ. AKB-21区（推定大雲寺跡）の瓦

Ⅲ. シャフリスタン2の瓦の諸類型

Ⅳ. 瓦類の出土状況

Ⅴ. 諸類型の年代

おわりに

はじめに

アク・ベシム遺跡（キルギス共和国）で、かつて「ラバト」、「契丹区」と呼ばれたシャフリスタン2では、帝京大学文化財研究所およびキルギス共和国国立科学アカデミーが進める発掘調査により中枢部（AKB-15区）、推定大雲寺跡（AKB-21区）から大量の瓦が出土し（第1図）、碎葉鎮城であったことが確実視されている。出土した瓦は布目痕をもつ中国系瓦（仮称「唐代瓦」）と、赤い色調の瓦（仮称「赤瓦」）に大別され、唐代瓦は4群9種の軒丸瓦、2群4種の軒平瓦、丸瓦、平瓦、熨斗瓦、鬼面文瓦、装飾瓦、赤瓦は丸瓦（「赤丸瓦」）、平瓦（「赤平瓦」）で構成されている。

碎葉鎮城は唐の西方進出の軍事拠点として7世紀後半に設置された都城で、シャフリスタン2から出土した瓦は、兵とともに派遣された瓦工人により中原地域の技術で製作されたものといえる。実際、出土した唐代瓦にみる軒丸瓦の文様様式や瓦当と丸瓦の接合技法、丸瓦や平瓦にみる製作技法は、中原地域のそれと同じといってよい。文献によれば、碎葉鎮城は王方翼が679年に築城したとされることから、一般的にはその前後の製作とみられている。しかし679年の築城については、それ以前に存在した都城の城壁のみを整備したとする修築説も根強い。すなわち碎葉が648年に安西四鎮のひとつに加えられたという説があり、その時点で主要部分の構築を想定するのであるが、この判別に対しては瓦をはじめとする考古学的分析が重要となる。

また、出土した軒丸瓦には蓮弁が変化した後出的な唐代の型式が存在することから、製作年代に時間幅をもち、創建ののちも補修が加えられたことがわ

かる。文献上、唐は碎葉鎮城を719年に放棄することから、7世紀後半もしくは679年から719年までの短期間に唐代瓦の諸型式が存在したことになり、唐代瓦の研究に対しても有益な情報といえよう。

また推定碎葉鎮の南西にある推定大雲寺跡は、690年の武則天の令により両京各州に設置された仏教寺院のひとつと推測されている。この推定大雲寺跡（AKB-21区）で唐代瓦とともに出土する赤瓦は、唐代瓦とは製作技法が大きく異なることから、赤瓦は唐代瓦よりも年代的に新しいと考えられる。すなわち唐代瓦が還元焰焼成で灰色を呈す布目瓦であるが、赤瓦の平瓦（赤平瓦）、丸瓦（赤丸瓦）の多くは成形台の上で作られた成形台作り（1枚作り）で、布目痕はなく、型離れをよくするため離れ砂をまぶし、酸化焰焼成で赤色に焼き上げられている。推定大雲寺出土の唐代瓦と赤瓦の変遷過程を明確にすることで、7世紀から11世紀にわたる碎葉鎮および大雲寺、碎葉（スイヤブ）の盛衰や、中国との交流、中央アジアにおける仏教信仰の在地化を知ることができる。

一般的に、一つの遺跡から複数の瓦当文様や製作技法の違う瓦が出土するのには理由がある。時間経過の中で范が改められる場合（異時異范）と、同時に複数范が用いられる場合（同時異范）とがあり、前者では災害や火災、戦乱による建物焼失、体制変化による再建、増築、改修時に建物とともに瓦が一新されるほか、建物の経年劣化に伴う破損に対する補修の中で、建物の存続期間に応じ複数の型式が生じることがある。また創建段階にあっても寺院伽藍であれば主要建物から建築が始まり、周辺建物や付属施設、回廊などは施工が遅れるなど、建物の建築順で瓦に新旧の差が生じることがあるし、瓦当范の

劣化による新たな范の導入や改范もありうる。後者の例としては、都城のように大規模な場合、工房別に范が準備され、建物や地区別に軒瓦の意匠、大きさを変更するケースが想定される。このような様々な要因を念頭に置いたうえで、碎葉鎮の瓦当文様、製作技法や焼成技法を検討し、瓦の年代観、変遷過程を確立することが急務といえる。

I. シャフリスタン2の唐代瓦

碎葉鎮の築城年に関し、前述したように648年構築説は無視できないものの、唐による実効支配の期間は記録上679年～719年ときわめて限定的である。文献史学に関する検討とは別に、考古学的には創建段階、中興段階、補修段階の瓦の判別とそれらの年代観の検討が必要になる。

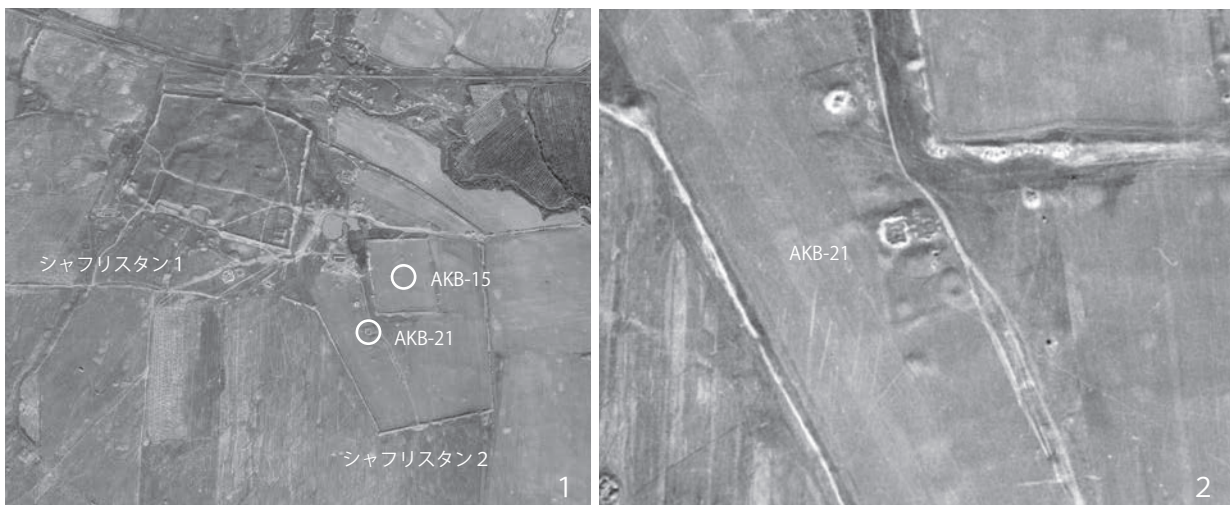
2017年に着手されたシャフリスタン2の調査では、五角形の城壁に囲まれた長方形の中枢部（AKB-15区）中央に南北に並んだ基壇群が配置し、各基壇を回廊状の区画（仕切り壁）が囲んだ状況が徐々に明らかになりつつある。また1号基壇の西側、南側には瓦が帯状に集積した瓦帯が検出されており、基壇上の建物が焼失、崩壊したのちに瓦礫を片付けたものと考えられている。また2022～2024年に調査されたPit.10は1号基壇前に掘り込まれた巨大な廃棄坑で、その下層には瓦や土器、獣骨を含んだ層や炭化物層などのレンズ状堆積が認められ、焼失したと推測される1号基壇建物の瓦や廃材、生活財を含んだ限定的な資料が得られた。

碎葉鎮城の軒丸瓦について、城倉正祥はⅠ型式（城

倉のいう「複弁蓮華紋瓦当」、Ⅱ型式（「単弁蓮華紋瓦当」、Ⅲ型式（「連珠紋瓦当」）に大別し、それらの変遷を論じた。すなわち唐代では複弁蓮華紋は7世紀代に流行した様式で、8世紀以降単弁が主体となり、連珠紋は蓮華紋の退化形であることから、盛行の時間軸をⅠ→Ⅱ→Ⅲとした。また武則天の治世（武周期、690～705年）には、唐洛陽城の出土瓦に複弁が少なく、単弁蓮華紋が主体的であることから、単弁蓮華紋の出現は7世紀後半であり、幅広杏仁形の単弁から細長く弁数の多い単弁へと変化し、その過程で連珠紋瓦当も出現するとみる。したがって王方翼による679年の碎葉鎮建設段階（城倉のいう修築段階）にはⅠ型式が伴い、同時期か若干下がる時期にⅡ型式を位置づけ、Ⅲ型式はさらに新しいものとして捉え、Ⅰ型式を7世紀後半、Ⅱ型式を7世紀後半～8世紀初頭、Ⅲ型式を8世紀代と推測した。この変遷観はシャフリスタン2の瓦の変遷過程を考える際の基本的な指標となる。

II. AKB-21区（推定大雲寺跡）の瓦

シャフリスタン2の中枢部南西にかつて「小高い丘」として存在したのが推定大雲寺である。帝京大学調査団では「第0仏教寺院」、城倉正祥は「ラバト内仏教寺院」とよび、最初に調査したN.H.ベルンシュタムにちなんで「ベルンシュタム遺跡」とも呼称されている。この推定大雲寺伽藍の北側で、2024年に帝京大チームはAKB-21区を設定し、調査に着手したところ、多量の唐代瓦と赤瓦が出土した。唐代瓦はAKB-15区と同様に軒丸瓦、軒平瓦、平瓦、



第1図 シャフリスタン2調査地点（AKB-15区、21区）と推定大雲寺（2）

丸瓦、鬘斗瓦からなり、文様、製作技法は同一であった。また赤瓦は、2019年調査のAKB-15区Pit.1で出土したほかは、ほとんど出土しておらず、AKB-21区の調査で改めて存在が再認識されることになった。推定大雲寺は碎葉鎮城の歴史的経緯を集約した象徴的な場所であり、出土瓦は碎葉鎮城の動向を直接的に物語る資料といえる。

この推定大雲寺地点に最初に調査のメスを入れたのはN.H.ベルンシュタムである。彼は1939・40年、小丘が小規模なトリトクリと認めて注目し、その周辺数カ所で調査を行った。そのうち発掘区Ⅰでは、厚さ30cmの表土層を剥すと10～15cm、20～30cmの崩落した瓦の厚い層が現れ、建物の床上を炭と灰の集積が覆っており、この地点をベルンシュタムは仏教小礼拝堂と推定した。また発掘区Ⅱでは部屋の隅に長さ31.5cmの丸瓦、40×24cmの平瓦を土管として再利用した竈施設が検出され、僧院と推定している。出土した瓦には布目痕をもつ灰青色の瓦と赤瓦があり、灰色の丸瓦には端部につなぎ合わせるための玉縁をもつ。また赤瓦には33.5×15cmの平瓦があり、表面には鋭利な線で描かれた雄鶏の絵や、指で書かれたウイグル語、サンスクリット語とみられる銘文が認められた。また、ベルンシュタムの調査では出土地点などの詳細は不明ながら、発掘区Ⅰ・Ⅱ付近で滴水瓦（第5図）や丸瓦が出土したとされる（Bernshtam1950、川崎・山内2020）。

その後、シャフリスタン2は1967年以降、一部の城壁を残して耕地化による削平で平坦地となり、小高い丘周辺も失われ、現在では畑一面に瓦や土器等が散在する状況を呈している。

1997年、加藤久祚はアク・ベシム遺跡の大雲寺について、杜環の『経行記』に以下の記述があることを示し、その所在地について論じた（加藤1997）。

「又有碎葉城、天寶七年〔748〕、北庭節度使王正見薄伐、城壁摧毀、邑居零落。昔、交河公主所居止之處。建大雲寺、猶存。」

加藤によれば、大雲寺建立の武則天の令は690年だが、碎葉に大雲寺が設置されたのは、碎葉鎮を唐が奪回した692年以降である。交河公主が蘇祿に嫁したのは723年で、第1仏教寺院が大雲寺の可能性が高いとしつつ、建築的にあまりに中央アジア的すぎることから否定的で、中国的要素の強い発掘区Ⅰ・Ⅱが大雲寺であった可能性を指摘している。

また山内和也は、仏教小礼拝堂地点から中国様式の仏像等、仏教関連遺物が出土していること、唐代と推測される布目瓦類が出土していること、第1・2仏教寺院ではそれらが未発見であることから、「スイヤブに存在したとされる大雲寺は、ベルンシュタムらが発掘した第0仏教寺院である可能性が高い」と結論付けた（川崎・山内 2020）。

2021年、城倉正祥もまた「ラバト内仏教寺院」の伽藍配置、出土した瓦に関する考察を行い、「寺院の規模、城内区画において規則的に南面する伽藍配置、杜懷宝碑の存在など、様々な要素から考えて、ラバト内寺院こそが唐大雲寺の可能性が極めて高い」とした。その中でラバト内仏教寺院の中軸線がシャフリスタン2の不整五角形を呈した西側外壁と同じ向きであることを指摘しているが、これは外壁を679年に王方翼が築城したとする説にもとづけば、寺院建設が城壁と同時期、あるいはそれ以降とする手がかりとなる。さらに滴水瓦の系譜については、中国での滴水瓦は五代十国期の南漢（917～971）に原型が生まれ、北宋（960～1125）に出現したもので、アク・ベシム遺跡が都市機能を維持した11世紀中頃までの瓦ではないかと推測するとともに、出土貨幣からすると「大雲寺が北宋期まで法灯を絶やさなかったとしても、中原地域との交流は非常に限られたもの」と推察した（城倉2021）。

2022年、櫛原はケン・ブルン遺跡の採集資料を紹介し、AKB-15区で出土した丸瓦との類似点を指摘した（櫛原2022）。

2024年、ベルンシュタムの発掘区Ⅰ・Ⅱ付近に相当する推定大雲寺跡地点（AKB-21区）の調査が帝京大学チームと龍谷大学により開始され、AKB-15区と同様の唐代瓦とともに赤瓦が多量に出土した。赤瓦については、ベルンシュタムの報告に記載があるものの、これまでその実態は不明であった。これは単に瓦が火災などの二次的な被熱で赤くなったというのではなく、唐代瓦とは異なる製作技術で作られた瓦として評価すべき資料といえる。

大雲寺は、前述したように武則天の勅令で690年に両京諸州に建立された仏教寺院である。タラス河の戦いで捕虜となった杜環の「経行記」によれば、751年頃、碎葉に大雲寺が現存したことが記載されていることから、8世紀中ごろの段階に存在したことが確実視されている。シャフリスタン2が碎葉鎮であったことは今や確定的で、それに付属す

るAKB-21区を大雲寺跡と推定することについては、かつて存在した基壇遺構にみる伽藍配置や唐代瓦から異論はない。ただし碎葉鎮での大雲寺設置については、692年の唐による碎葉鎮奪回時以降の設置が想定されているが、その時点で寺院が新設されたのか、679年の碎葉鎮築城時、あるいはそれ以前に²⁾建立された前身寺院を改名して大雲寺としたのか。また唐が碎葉鎮から撤退したのち、滴水瓦の段階（10～11世紀代）まで寺院として維持されたことが推定されているが、どのような背景のもとで仏教寺院が維持されたのか。また赤瓦は裏面に布目痕をもたない1枚作りを主とし、それらの製作技法に数種があるが、唐代瓦と赤瓦との関連性、赤瓦の変遷については明らかではないなど、寺院や瓦をめぐる諸課題がある。

Ⅲ．シャフリスタン2の瓦の諸類型

ここでは、シャフリスタン2で出土した唐代瓦（軒丸Ⅰ～Ⅲ類、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類、平Ⅰ類、丸Ⅰ類、熨斗瓦）、赤瓦（平Ⅱ・Ⅲ類、丸Ⅱ～Ⅳ類）に関し、大きさや文様の特徴、製作技法、出土量について記載する。なお、軒丸瓦はⅠ類を四弁複弁蓮華文、Ⅱ類を七弁（単弁）蓮華文、Ⅲ類を細弁蓮華文、Ⅳ類を重連珠文に4大別し、文様、范の違いでⅡ類を4種、Ⅲ類を3種に細別する³⁾。また軒平瓦は羽状重弧文、重弧文に2大別し、細部の違いで4細別する。

軒丸Ⅰ類 四弁複弁蓮華文軒丸瓦（第2図1）

直径12.6cm、内区径9.2cm。内区は縁取りのある四弁の複弁蓮華文で、隆起した間弁をもつ。中房には大型の蓮子1を配する（中房1）。蓮弁外周には圏線のない連珠文があり、やや大粒の連珠文が並ぶ。瓦当裏面の接合技法は刻み技法であるが、ヘラ起こしによるキャタピラ状の刻みが認められ（刻み技法a類、何ほか2010）、刻みのし方が丁寧である。

軒丸ⅡA類 七弁蓮華文軒丸瓦（第2図2）

直径12.5cm、内区径9cm。内区は縁取りのある7弁の単弁蓮華文で、隆起した間弁と外周をもつ。中房には中央に1、周囲に7の蓮子をもつ（中房1+7）。蓮弁外周には隆起した二重圏線をもつ連珠文があり、やや小粒で細かな連珠文を配する。瓦当裏面には丸瓦部との接合のための沈線状の連続刻みを弧状に施す（刻み技法b類、何ほか2010）。

軒丸ⅡB類 七弁蓮華文軒丸瓦（第2図3）

直径12.5cm、内区径8.2cm。文様はⅡAとほとんど同じであるが、蓮弁外周には圏線のない連珠文があり、小粒で細かな連珠文を配している。瓦当裏面には、ⅡA同様に刻み技法b類がみられる。

軒丸ⅡC類 七弁蓮華文軒丸瓦（第2図4）

直径12cm、内区径8.5cm。文様はⅡAとほぼ同じであるが、蓮弁外周には圏線をもつ連珠文があり、大粒の連珠文を配する。また瓦当裏面には丸瓦部との接合のためのカキメを施す（カキメ技法）。この接合技法は本類型限定の特徴的技法である。

軒丸ⅡD類 八弁蓮華文軒丸瓦（第2図5）

直径14cm、内区径10cmとやや大型。内区は縁取りのある八弁の単弁蓮華文で、隆起した間弁をもつ。中房には中央に1、周囲に7の蓮子をもつ。蓮弁外周には圏線のない連珠文が巡り、大粒の連珠文を配する。接合技法は不明。

軒丸ⅢA類 細弁蓮華文軒丸瓦（第2図6）

直径11.8cm、内区径7.6cm。内区は縁取りのない細弁化した花卉状の単弁蓮弁文を20数弁有し、蓮弁間には間弁がない。中房は中央のやや大きな蓮子の周囲に推定12個の蓮子を配し、圏線はない（中房1+12）。蓮弁外周には圏線のない連珠文帯がある。瓦当裏面には刻み技法が認められ、刻みは弓状の連続沈線文となる。

軒丸ⅢB類 細弁蓮華文軒丸瓦（第2図7）

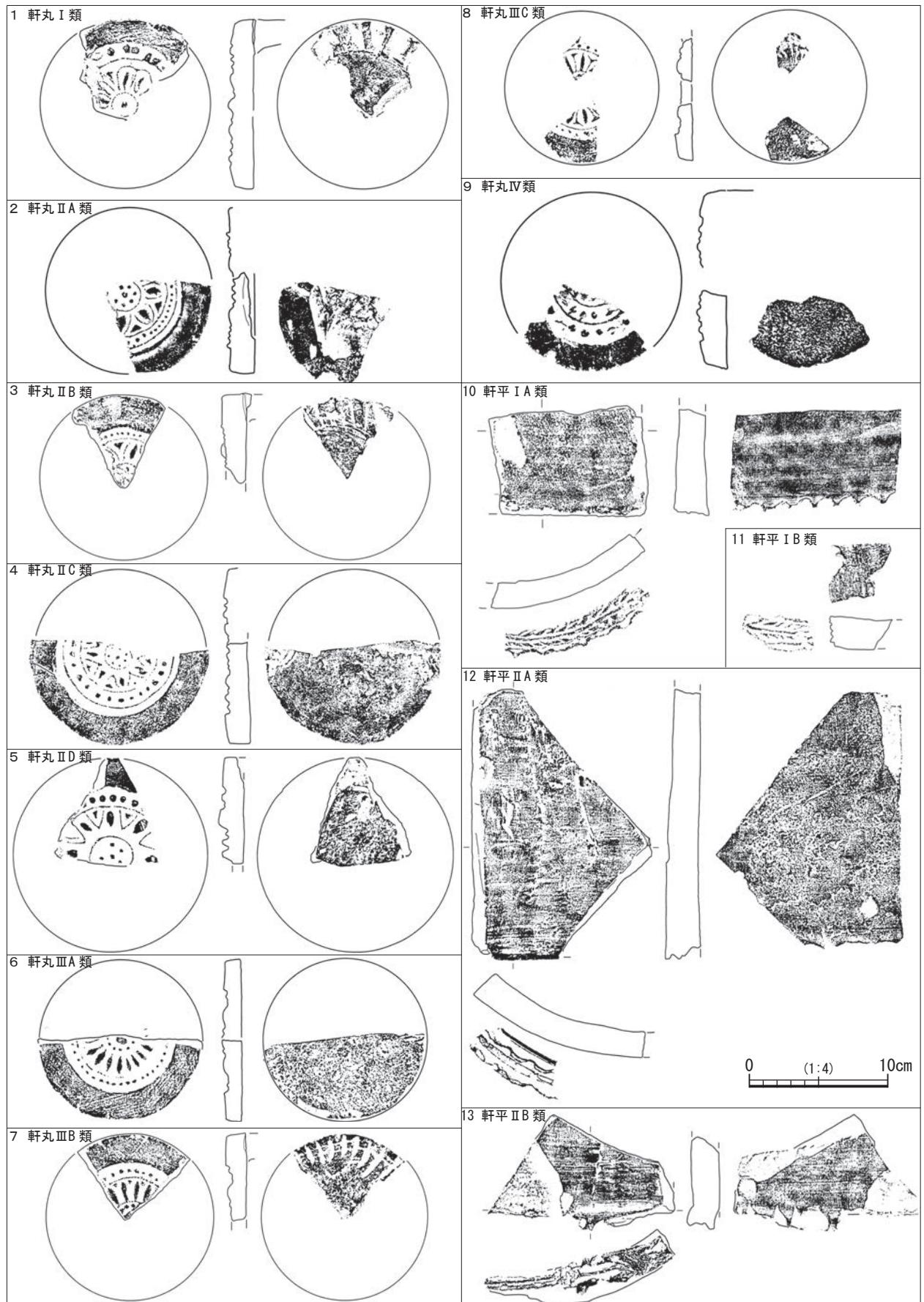
軒丸ⅢA類に酷似するが、弁間に小さな珠文状の間弁をもつ。直径12cm、内区径8cm。中房は圏線をもち、蓮子数は不明だが中央のやや大きな蓮子周囲に推定12個の蓮子を配すると思われる（中房1+12）。接合技法は刻み技法b類。

軒丸ⅢC類 細弁蓮華文軒丸瓦（第2図8）

直径11cm、内区径7cm。内区には縁取りのない細弁化した単弁蓮弁文を推定12弁程度有し、蓮弁間には細長い間弁を伴う。中房は圏線をもち、蓮子を複数配しているが、破片のため詳細は不明。蓮弁外周には圏線のない連珠文帯があり、連珠文は細かい。瓦当裏面には刻み技法をもち、放射状の沈線を刻む（刻み技法b）。

軒丸Ⅳ類 重連珠文軒丸瓦（第2図9）

直径13cm、内区径9cm。内区には中房周囲に2重の珠文帯をもち、中房はベルンシュタムの報告資料によれば中央蓮子の周りに6個を配し（中房1+6）、中間に巡る連珠文は推定12～13個で、これは軒丸Ⅲ類の細弁化した蓮弁と間弁が連珠文に変形し



第2図 軒丸瓦、軒平瓦の類型

たものと思われる。また外周の珠文帯は中房、中間の連珠文と同じ大きさで、大粒であり、外周に圈線はない。瓦当裏面の接合技法は不明。

軒平ⅠA類 羽状重弧波状文軒平瓦（第2図10）

幅2.5cmの平瓦下端面に半裁竹管またはヘラ描きで羽状沈線文を施文し、下端を波状に連続押圧する。これまでの検出数は1点のみ。

軒平ⅠB類 羽状重弧文軒平瓦（第2図11）

幅2.3cmの平瓦下端面に半裁竹管で羽状沈線文を施文し、下端は重圈文のままで波状押圧文を施文しない。1点のみ。

軒平ⅡA類 波状重弧文軒平瓦（第2図12）

幅2.5cmの平瓦下端面に半裁竹管文で三重弧文を施文し、中央、下の弧線を連続押圧によって波状文としている。1点のみ出土。

軒平ⅡB類 重弧文軒平瓦（第2図13）

幅2.3cmの平瓦下端面に半裁竹管文で三重弧文を施文し、上・下の弧線文を連続押圧により波状文とする。1点のみ出土。

丸Ⅰ類（第3図14）

AKB-21区で出土した完全な資料によれば長さ37.5cm、幅15cm、玉縁を有し、凹面に布目痕をもつ。布袋を被せた円筒型作り、粘土帯巻き上げ成形、縦位の縄叩きののち、横ヘラナデによる整形を行い、型を抜いた後、下端部をヘラ削りする。凹面側に分割裁線を入れ2分割する。

丸Ⅱ類（赤瓦、第3図15-1～4）

ロクロナデ整形、上端側に玉縁をもち、下端側には凸面に押圧によるくぼみが連続したものが多いが、ないものもあり、細分の余地がある。円筒2分割によるが、布目痕はない。上端に玉縁をもつものがあり、形態は丸Ⅰ類に類似するがやや退化している（丸Ⅱa類）。また玉縁がなく、角頭状を呈した事例もある（丸Ⅱb類）。いずれも破片のため、下端部の押圧文との関係性は明らかではなく、現時点での暫定的な分類とする。土器製作との関連性をうかがわせる類型で、土器作り工人による模倣的な製作と推測される。

丸Ⅲ類（赤瓦、第3図16-1・2）

凸面縦ナデで、上端側に段差状の玉縁をもつ。円筒粘土帯巻き上げ（輪積み）作りとみられ、2分割の可能性がある。内面（凹面）に布目痕はない。AKB-8区出土の土管はラッパ状の円筒形で、内外面は斜め方向のナデ調整が行われ、ナデ技法に違いは

あるものの、本類型との製作技法上の共通性がある。
丸Ⅳ類（赤瓦、第4図17）

布目痕のない1枚作りで厚みは均一ではなく、断面形は中央が厚く両側が薄い不均一なU字形となる。2019年のPit.1で出土し、伴出した土器付着炭化物の放射性年代測定の結果、11世紀後半～12世紀中葉であったことから、廃棄時の年代ではあるが本類型の定点とすることができ、11世紀代以前の瓦と推測する。

平Ⅰ類（第4図18）

23.5～24×38.5cm。粘土帯巻き上げ成形、桶巻4枚作りで、凹面側から分割裁線を入れたのちに4分割し、分割時の目印として凹面側には4箇所の分割界点をもつ。凸面整形痕として、弧状に叩き上げた縄叩き痕と「板オサエ」痕（城倉2021）をもつものがあり、技術的な違いが年代差を示す可能性がある。上端側は丸くナデ調整を行い、下端面にはヘラ削りを行う。凹面の布袋がずれて下端側に桶板の痕跡をもつものがあり、幅1.8～2cmの狭い板で桶型が作られたことがわかる。凹面に布目痕をもつ。

平Ⅱ類（赤瓦、第4図19）

厚みは均一で、側面は平瓦Ⅰ類に似せてヘラ削り調整を行うが、布目痕、分割裁線や分割界点はなく、1枚作りで製作されたと思われる赤瓦。大きさは不明だが、ベルンシュタム報告例に33.5×15cmの平瓦があり、参考になる。凸面側に焼成前線刻画をもつものがあり、やはりベルンシュタム報告の雄鶏の図像との類似性が認められるほか（Bernshtam1950）、同時期と推測されるAKB-8区出土の土管にコウモリまたは鳥を焼成前にヘラ描きした図像があり、時期的な関連性が指摘できる。

平Ⅲ類（赤瓦、第4図20）

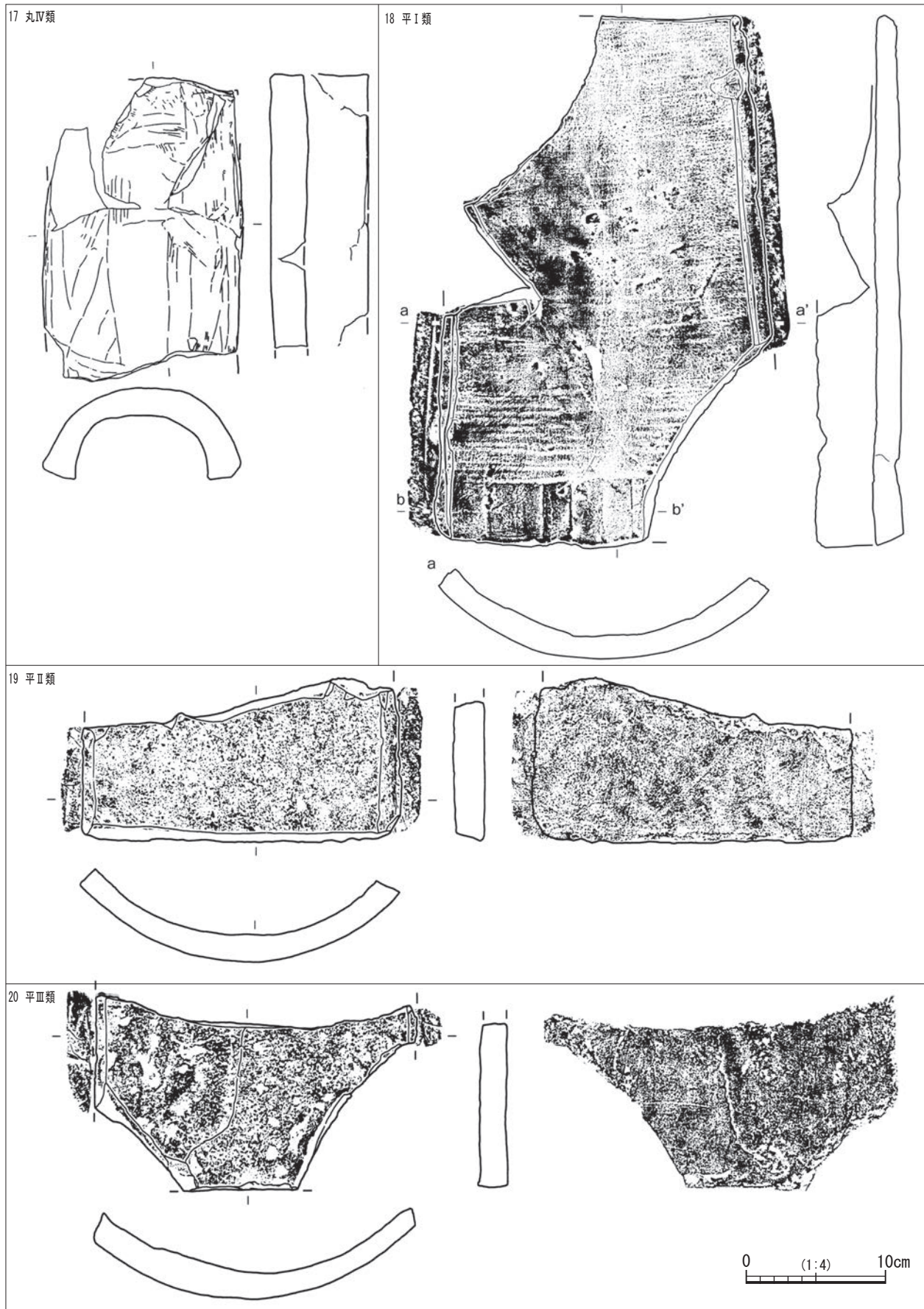
布目痕をもたず、厚みは不均一で、側縁は凸面側を丸くナデ調整したもの、ヘラ削り調整したものがある。また平面形の角は丸くなっている。凸面に布目をもつものがあるなど、細分の余地を残している。

熨斗瓦（第5図21）

幅7～10cmで、完全な資料はない。縁辺に平瓦と同じ分割界点をもつものがあり、唐代平瓦の凹面側から分割裁線を入れ、1枚の平瓦を縦に3分割して製作している。したがって本来の長さは平瓦と同じであろう。左右側面のうち片側のみ丸くナデ調整が加えられているが、これは棟などに用いた場合、見える側のみを調整したものと考えられる。なお、赤瓦

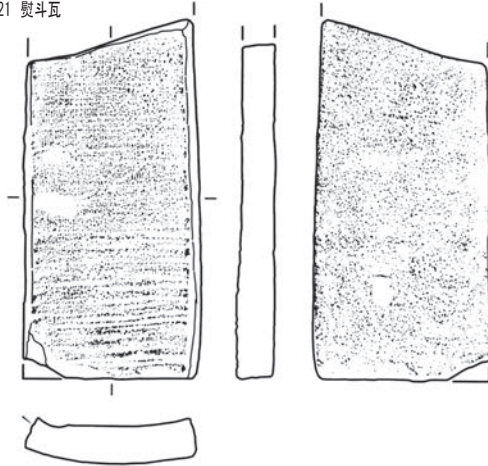


第3図 丸瓦の類型



第4図 丸瓦、平瓦の類型

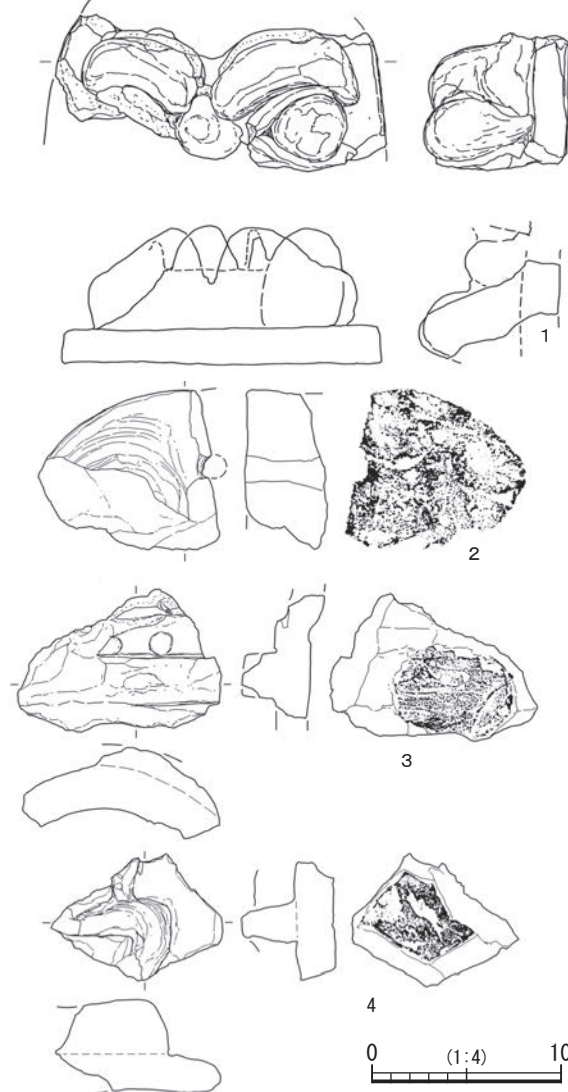
21 熨斗瓦



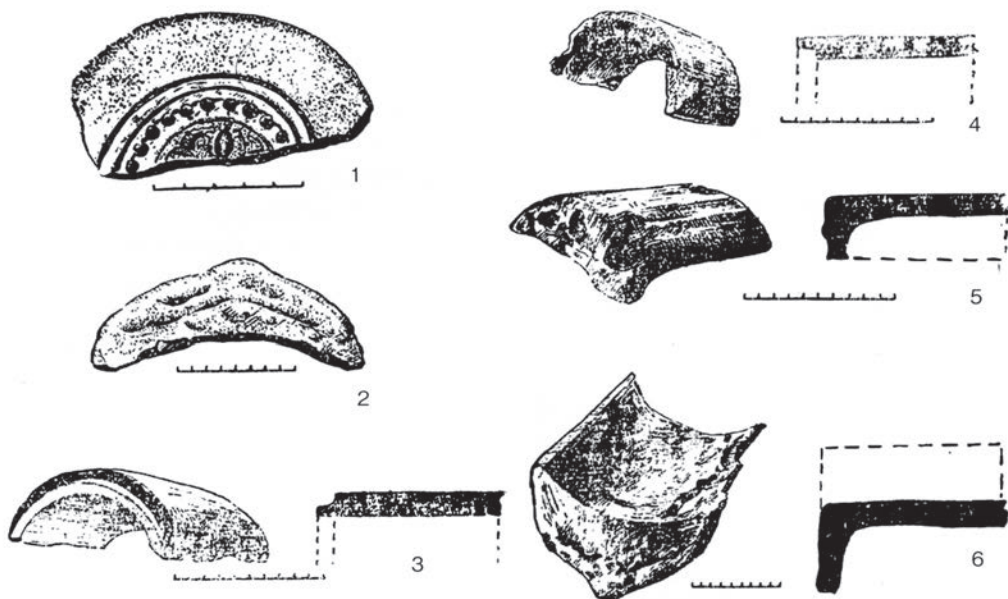
22 滴水瓦



23 鬼面文瓦・装飾瓦



24 Kozhemyako. P. N. より改変



第5図 熨斗瓦、鬼面文瓦、装飾瓦、滴水瓦、ベルンシュタム調査資料

に熨斗瓦はない。

滴水瓦（第5図22-1・2）

ベルンシュタム（1950）に2点の精緻な図が掲載されている。それによれば、中央下端に突出部をもつ三日月形の飾り板に連珠文、連続刺突文を施文したもので、型作りのようである。同様な軒平瓦として、カジミヤコ（Kozhemyako 1959）にも別の図が2点示されていることから（第5図24-2・6）、ベルンシュタムの発掘区Ⅱから出土した赤瓦の一部ではないかと思われる。

鬼面文瓦（第5図23-1・2）

2点のみ出土。1は2024年にAKB-15区Pit.10より出土した鬼（獣）面文瓦の眼のあたりの破片。幅18cm、厚さ2cmの粘土板に肉厚の顔面表現があり、眉が太く、眼は丸く大きい。眉の上には角状の貼付痕があり、発掘当初、眼と眉に墨による彩色が認められた。2は2023年出土の額のあたりの破片で、厚さ4.2cmの粘土板で眉間の上に釘孔をもつ。粘土板の厚みは違うものの、1・2は同じ大きさ、形態といえる。

装飾瓦（第5図23-3・4）

3は丸瓦外周に突帯を添付し、それに沿って円形の文様をもつ。また4は粘土板に粘土紐を貼付したもので、鬼面文瓦の可能性があるが、顔面のどの部分かは不明。掲載図のほかに1点ある。

Ⅳ．瓦類の出土状況

アク・ベシム遺跡の出土遺物に関しては種別ごとに重量を計測しているほか、軒丸瓦、軒平瓦についてはほぼ全点数を報告してきた。ここでは、これまでのデータに加え、2024年に出土した資料を合わせ、2017～2024年の6次の調査で出土した軒瓦および推定大雲寺の瓦について現時点までの出土量に関し整理しておく。

唐代軒丸瓦の各類型の出土点数は、軒丸瓦(76点)、軒平瓦(4点)、計80点が出土し、その内訳は表1のようになる。それによると軒丸Ⅱ類が57点(75%)と最も多く、中でも軒丸ⅡC類が31点と全体の4割を占める。次いで軒丸Ⅰ類、軒丸Ⅲ類と続き、軒丸Ⅳ類は1点のみである。

それらの出土地点をまとめたのが表2である。各遺構にどのような軒丸瓦が伴うのかを知るための基礎的なデータであるが、出土した瓦が帰属する遺構を厳密に特定することは容易ではなく、とくに基壇

周辺から出土した場合は難しい。とりわけAKB-15区の1号基壇では、西側の瓦帯が10世紀代以降に二次的に片付けられた様相を呈していることから、多くは1号基壇建物に由来する瓦と考えられるものの、周囲の遺物を混在した状況と理解される。そうしたなかで意味のある類型分布の状況として、2017年調査の瓦帯(1号基壇)に軒丸ⅡA類が集中する例、花柄の石敷上層(2号基壇)に軒丸Ⅰ類が集中する例、2024年調査のAKB-21b区で軒丸ⅡC類を中心にA～D類が存在する例がある。これらから想定されるのは、後述するように軒丸Ⅰ類が碎葉鎮創建期の瓦とすると、基壇建物2がその段階に相当し、基壇建物1、推定大雲寺はそれ以降の段階にあたるといえる。

AKB-21区(推定大雲寺)での瓦の出土状況について触れておきたい。AKB-21b区(帝京大学担当地区)における2024年の調査データによれば、総重量および割合は以下のとおりである。

唐代瓦と赤瓦の量(丸・平瓦) 総重量 508386g

唐代瓦368121g(72%) 赤瓦140265g(28%)

唐代丸瓦と赤丸瓦の量 総重量121115g 唐代丸

瓦 90741g(75%) 赤丸瓦 30374g(25%)

唐代平瓦と赤平瓦の量 総重量387271g 唐代平

瓦 277380g(72%) 赤平瓦 109891g(28%)

(参考1) 唐代瓦の丸瓦と平瓦の量 総重量368121g

丸瓦 90741g(25%) 平瓦 277380g(75%)

(参考2) 唐代瓦のうち熨斗瓦の量 総重量(丸・

平・熨斗) 373760g 熨斗瓦 5549g(1%)

(参考3) 赤瓦の丸瓦と平瓦の量 総重量140265g

丸瓦 30374g(21%) 平瓦 109891g(78%)

推定大雲寺では、唐代瓦と赤瓦の重量比はおおむね3:1であった。また丸瓦、平瓦の唐代瓦と赤瓦との重量比も同様の割合となる。

表1 軒瓦の類型別出土点数

軒丸瓦(76点)	数	%	軒平瓦(4点)	数	%
軒丸Ⅰ類	12	16	軒平ⅠA類	1	25
軒丸ⅡA類	14	18	軒平ⅠB類	1	25
軒丸ⅡB類	11	15	軒平ⅡA類	1	25
軒丸ⅡC類	31	41	軒平ⅡB類	1	25
軒丸ⅡD類	1	1			
軒丸ⅢA類	1	1	型式(76点)	数	%
軒丸ⅢB類	4	5	軒丸Ⅰ類	12	16
軒丸ⅢC類	1	1	軒丸Ⅱ類	57	75
軒丸Ⅳ類	1	1	軒丸Ⅲ類	6	8
			軒丸Ⅳ類	1	1

表2 軒瓦の出土地点

器種	類型	報告番号	出土地点	軒丸径/厚cm 軒平幅/厚cm	接合技法	器種	類型	報告番号	出土地点	軒丸径/厚cm 軒平幅/厚cm	接合技法
軒丸	ⅡA	15-17-070	瓦帯ST6層	12.3/2.2	刻み技法 b	軒丸	ⅡA	15-22-125	PI1	11.8/1.9	刻み技法 b
軒丸	ⅡA	15-17-071	T6	12.8/1.8	刻み技法	軒丸	ⅡC	15-22-126	PI1	12.9/1.6	
軒丸	ⅡA	15-17-072	表採	12.4/2.0	刻み技法	軒丸	ⅡC	15-22-129	T6	12.2/1.6	
軒丸	ⅡC	15-17-073	T5	—/1.7		軒丸	ⅡC	15-22-130	T6	12.4/1.6	カキメ技法
軒丸	ⅡA	15-17-074	表採	12.4/1.7	刻み技法	軒丸	ⅡB	15-22-131	T6	12.0/1.4	
軒丸	ⅡA	15-17-075	T3	12.7/1.8	刻み技法 b	軒丸	ⅡC ?	15-22-132	T6・7	11.1/1.5	
軒丸	ⅡA	15-17-076	T8	12.3/1.7		軒平	ⅠA	15-22-133	PI1	—/2.4	
軒丸	ⅡB	15-17-077	瓦集中2	12.7/1.5		軒平	ⅠB	15-22-134	PI1	—/2.2	
軒丸	ⅡB	15-17-078	T5・6	12.5/1.6		軒丸	ⅡB	15-23-146	T1	11.9/1.2	
軒丸	ⅡB	15-17-079	表採	12.5/1.8	刻み技法	軒丸	ⅡB	15-23-147	T2	11.8/1.7	刻み技法 b
軒丸	Ⅰ	15-17-080	R10	12.3/2.0	刻み技法	軒丸	ⅢB	15-23-148	T2	11.9/1.4	刻み技法 b
軒丸	Ⅰ	15-17-081	T5	12.8/2.1		軒丸	ⅢB	15-23-149	T2	12.0/1.5	刻み技法 b
軒丸	Ⅰ	15-18-021	T5石敷	13.0/1.8	棟先 ?	軒丸	ⅡB	15-23-150	T2	11.7/1.4	
軒丸	Ⅰ	15-18-022	T5	12.6/2.0		軒丸	ⅡC	15-23-151	T2	12.6/1.6	カキメ技法
軒丸	Ⅰ	15-18-023	T5石敷	12.7/1.5		軒丸	ⅡC	15-23-152	T2	—/1.7	
軒丸	Ⅰ	15-18-024	T5	12.3/1.8	刻み技法 a	軒丸	ⅡA	15-23-153	T2	—/1.4	
軒丸	ⅡC	15-18-025	T6	12.9/1.8	カキメ技法	軒丸	ⅡC	15-23-154	T2	—/1.6	
軒丸	ⅡC	15-18-026	T8	—/2.0		軒丸	ⅡC	15-23-155	T2	11.9/1.7	
軒丸	ⅡC	15-18-027	T5石敷	13.3/1.8	カキメ技法	軒丸	ⅡC	15-23-156	T2	11.8/1.2	
軒丸	ⅡC	15-18-028	T5	12.6/1.8		軒丸	ⅡC	21 b -24-015	T1	12.3/1.4	カキメ技法
軒丸	Ⅰ	15-18-029	T6	13.0/1.7		軒丸	ⅡC	21 b -24-016	T1	—/1.7	カキメ技法
軒丸	ⅡC	15-18-030	T6	12.8/1.9		軒丸	ⅡC	21 b -24-017	T1	12.7/1.3	カキメ技法
軒丸	ⅡC	15-18-031	T5	12.9/1.8	カキメ技法	軒丸	ⅡC ?	21 b -24-018		12.0/1.6	
軒丸	ⅢB	15-18-032	T5石敷	13.0/1.5		軒丸	ⅡD	21 b -24-019		14.2 /1.8	
軒丸	ⅡB	15-18-033	T5	12.9/1.4	刻み技法 b	軒丸	ⅡA	21 b -24-020	T1	—/1.6	
軒丸	ⅢB	15-18-032	T5石敷	12.9/1.7		軒平	ⅡA	21 b -24-21		—/2.7	
軒丸	ⅡB	15-18-033	T5	12.8/1.5	刻み技法 b	軒平	ⅡB	21 b -24-22		—/2.4	
軒丸	ⅡA	15-19-202	P2	12.3/2.0		軒丸	ⅢC	15-24-仮141	P14	10.2/1.3	刻み技法
軒丸	Ⅰ	15-19-203	P3	12.2/2.1	棟先 ?	軒丸	ⅡC	15-24-仮142	P10 23層	12.3/1.6	
軒丸	ⅡC	15-19-210	P7	12.0/1.6		軒丸	Ⅰ	15-24-仮143	P10 23層	12.5/1.8	刻み技法
軒丸	ⅡA	15-19-213	瓦帯	—/2.2		軒丸	ⅢA	15-24-仮144	P14	11.7/1.3	
軒丸	ⅡC	15-19-225	塙雨落北	13.0/1.7		軒丸	ⅡC	15-24-仮145	P10 24層	12.5/1.8	
軒丸	Ⅳ	15-19-227	瓦集中	12.8/2.2		軒丸	ⅡC	15-24-仮170	T6東	12.6/2.0	カキメ技法
軒丸	Ⅰ	15-19-230	瓦集中	11.8/1.8		軒丸	Ⅰ ?	15-24-仮171	T6西	12.5/1.6	
軒丸	ⅡC	15-19-231	瓦集中	12.9/2.0		軒丸	ⅡC	15-24-仮173	T6東	12.8/1.8	
軒丸	ⅡA	15-19-240	T11	13.2/2.0	刻み技法 b	軒丸	ⅡC	15-24-仮177	T6西	12.8/1.8	カキメ技法
軒丸	ⅡC	15-22-121	P10	12.4/1.7	カキメ技法	軒丸	ⅡA	15-24-仮178	T6西	12.3/1.8	刻み技法
軒丸	ⅡC	15-22-122	PI1	11.1/1.6		軒丸	ⅡC	15-24-仮179	T6西	—/1.4	
軒丸	ⅡC	15-22-123	PI1	13.4/1.6		軒丸	ⅡA	15-24-仮180	T6	—/1.6	
軒丸	ⅡC	15-22-124	PI1	12.5/1.7	カキメ技法	軒丸	Ⅰ	15-24-仮191	T3	12.3/1.7	

V. 諸類型の年代

ここでは、碎葉をめぐる唐の支配に関する文献側の成果をもとに、シャフリスタン2の唐代瓦の変遷を考える。唐代の碎葉鎮に関する略史は以下のように整理されている（柿沼2017を改変）。

648年 唐が安西四鎮を設置（四鎮に碎葉を含める説あり）。

678年 唐が阿史那都支を捕らえ碎葉を接取。

679年 9月頃、唐の王方翼が碎葉鎮城として整備。杜懷宝が碎葉を鎮守。

686～687年 吐蕃が碎葉をおとす。

692年 唐と吐蕃決戦、突騎施と結んだ唐が勝利。

碎葉を接取。この頃、大雲寺設置か。

694年 吐蕃が碎葉を攻撃。

700年 唐は阿史那斛瑟を平西軍大総管として碎葉に派遣。

703年 突騎施が碎葉を奪取。その後、突騎施の妥協により唐碎葉鎮城は名目上存続。

711年 東突厥が突騎施の婆葛を殺害、碎葉は空白に。

719年 唐は名実ともに碎葉を放棄。

748年 北庭節度使王正見、碎葉鎮城の城壁を破壊。

751年 大雲寺はなお存在（杜環『経行記』）。

以上の歴史的経緯を踏まえ、唐代瓦の分類と前後関係、製作技法と時期について、以下のように理解しておく。

軒丸Ⅰ類（四弁複弁蓮華文）は城倉の指摘に基づき、Ⅱ類に先行し、7世紀後半代、679年前後の瓦と考える。刻み技法は確認数が少ないながらa類が認められ、ヘラ起こしによる連続刻みを特徴としている。Ⅱ類の沈線状の連続刻み（刻み技法b類）とは区別でき、製作時期の違いを示す。

軒丸Ⅱ類（七弁蓮華文）は692年～705年の武周期の瓦とする。ⅡA類、ⅡB類は蓮弁に丸味があり、圏線は曲線的で、外周の珠文帯が小粒で数が多いこと、裏面の刻み技法が類似することから同時期と思われる。それに対しⅡC類は蓮弁が短く、蓮弁、間弁、圏線に変形が認められ、裏面の接合技法はカキメ技法となる。ⅡAの模倣で、ⅡA、ⅡBより後出と推測されることから、カキメ技法は刻み技法よりも新しい接合技法と考えられる。ⅡD類は直径が大きいことから棟先などに用いた特殊瓦と推察されるが、ⅡC同様に変形が進んだ段階の瓦で、ⅡCと同時期または後出的である。

軒丸Ⅲ類（細弁蓮華文）は量が少なく、複弁もしくは単弁蓮華文の変形と考えると、Ⅰ・Ⅱ類より後出で、8世紀前半代でも武周期以降（706年以降）とみる。またⅢC類は間弁の形態に古い様相がうかがえることから、Ⅲ類でもやや古く位置づけられる。

軒丸Ⅳ類（重連珠文）はⅢ類同様に量が少ない。変形が著しいことから新しく、軒丸Ⅲ類と同じか、さらに新しいと推測する。

軒平Ⅰ類は1号基壇周辺からわずか2点のみの出土である。1号基壇の年代が確定できないものの、1号基壇には軒丸Ⅱ類を多く伴う傾向から武周期段階の造営と考え、軒平Ⅰ類をその時期に伴うものと推測する。なお、軒先を軒丸瓦、軒平瓦が交互に飾っていたとすれば軒丸瓦と同数がなければならないが、軒丸瓦に比べ圧倒的に少なく、軒平瓦が使われた部分は限定的であった可能性がある。

軒平Ⅱ類は現在のところAKB-21区のみで2点が出土していることから、軒丸Ⅱ類に伴うものと思われるが、AKB-15区では未確認である。またAKB-21区では軒丸Ⅱ類の中でもⅡC類が多い傾向から後

出的である。したがってⅡ期（武周期）後半と推測する。

丸Ⅰ類は玉縁をもつ唐代の丸瓦で、7世紀後半～8世紀前半代とみられる。

丸Ⅱ類は、布を用いた円筒型作りではなくロクロ成形で、内面に横方向のロクロ目を持ち、円筒2分割で製作されている。土器作りを応用した製作技法と考えられ、後出の成形台作りが出現する以前の土器作り工人による模倣的な類型であり、玉縁部もまた丸Ⅰ類の模倣形である。円筒2分割の系譜を引くことから、丸Ⅰ類に続く段階と思われる。

丸Ⅲ類は、丸Ⅱ類よりもさらに変形した玉縁状段差を持ち、粘土紐巻き上げもしくは輪積み円筒2分割の可能性があることから、丸Ⅱ類に続くものといえる。類似した土製品に10世紀代以前と推測されるAKB-8区の土管があり、ほぼ同時期と推測する。土管は、AKB-8区出土例によれば片側が広がったラッパ状で、玉縁状段差はなく、厳密には丸瓦Ⅲ類とは異なるが、土管を縦に半裁したものが丸瓦Ⅲ類に近い。

丸Ⅳ類は、かまぼこ状の成形台の上で製作した1枚作りで、凹面に離れ砂が付着する。AKB-15区Pit.1で出土した瓦は11～12世紀の推定年代であるが、大雲寺もしくは後継の仏教寺院が廃絶した後、赤瓦が土管などに再利用されたのちピット内に廃棄されたもので、瓦として機能していたのは都市機能が存続していた11世紀代以前と考えておく。城倉が指摘するように本類には滴水瓦が伴うものと思われる。

平Ⅰ類は唐代瓦と全く同じ製作技法をもつ桶巻作りで、7世紀後半～8世紀前半代とみられる。

平Ⅱ類は均一な厚みを持ち、成形台1枚作りとみられるが、側面のヘラ削り調整に桶巻作りの特徴を意識していることから平Ⅰ類に続くものとし、丸Ⅱ・Ⅲ類に伴うとみられる。

平Ⅲ類は成形台1枚作りで、平Ⅱ類に続くもので、丸Ⅳ類に伴うものと思われる。

AKB-15区Pit.10ではⅠ～Ⅲ類が出土し、放射性炭素年代測定では7世紀後半から8世紀前半の年代が得られており、1号基壇に存在した建物の存続年代を示している。また1号基壇西側にあたる瓦帯および1号基壇周辺ではⅡ類が多く出土したことから武周期段階、2号基壇に伴う花柄の石敷付近では軒丸Ⅰ類を主とすることから、碎葉鎮の創建期、初期段階の建物と思われる。それに対しAKB-21区では調

査に着手したばかりで詳細は不明だが、現時点では軒丸ⅡC・ⅡD類を中心とし、軒丸Ⅰ類が未確認であることから、武周期でも後半の可能性がある。この段階に軒平Ⅱ類が伴うと考える。

以上により、軒瓦と各種瓦の変遷、組み合わせを整理し、以下のように推測する。碎葉鎮創建については軒丸瓦Ⅰ類の存在から679年前後とし、推定大雲寺跡には現時点では軒丸Ⅰ類が未確認で、軒丸Ⅱ類のみが存在することから792年以降の建設と考える。とくにシャフリスタン2の西側城壁と推定大雲寺の軸線が同じことから679年に想定される王方翼の築城以前の設置はありえないと考える。また丸Ⅱ～Ⅳ類、平Ⅱ・Ⅲ類は9～11世紀の瓦とする。また推定大雲寺に伴う滴水瓦は、今後AKB-21区から出土することが期待されるが、時期については、城倉が指摘するように11世紀代に伴うものと考え、仏教寺院の廃絶時期はシャフリスタン1が都市機能を喪失した段階と一致するものと推測しておく。

したがって瓦をめぐる碎葉、碎葉鎮、大雲寺の時期変遷は、推測を交えて以下のように整理したい(第5図)。

- 1期 碎葉鎮創建期(678～679年) 軒丸Ⅰ類、軒平Ⅰ類、丸Ⅰ類、平Ⅰ類
- 2期 碎葉鎮中興期(692～705年)
 - 前半 大雲寺創建段階、軒丸ⅡA・B類、軒平Ⅱ類、丸Ⅰ類、平Ⅰ類
 - 後半 軒丸Ⅱ類C・D類、軒平Ⅲ類、丸Ⅰ類、平Ⅰ類
- 3期 碎葉鎮改修期(706～719年)
 - 前半 軒丸ⅢA・B・C類、丸Ⅰ類、平Ⅰ類
 - 後半 軒丸Ⅳ類、軒丸C類、丸Ⅰ類、平Ⅰ類
- 4期 9世紀代 丸Ⅱ類、平Ⅱ類
- 5期 10世紀代 丸Ⅲ類、平Ⅱ・Ⅲ類
- 6期 11世紀代 丸Ⅳ類、平Ⅲ類、滴水瓦

杜環の記録により8世紀中頃に大雲寺が現存していたとすれば、4～6期の建物は、大雲寺もしくは後身の仏教寺院と考えられる。赤瓦の丸瓦にみる4期での土器製作との共通性をもつ製作技法、5期での土管との共通した製作技法により、唐の撤退後も在地的な製作技法で瓦作りが続けられたと推測され、在地勢力によって仏教寺院が維持管理されていたことになる。ただし3期と4期の間で技術的系譜は途絶え、4期では3期の形態模倣をしつつ、技術的には独自の瓦作りに移行する。これは9世紀以降、中

国人などの仏教信者が一定数碎葉周辺に居住していた、あるいはチュー川流域に仏教が在地化したことを推測させるもので、11世紀に至る間、滴水瓦が伝えられるなど中国からの直接、間接的な影響を少なからず受けていた可能性、もしくは想像ではあるが西側の西洋瓦の影響の可能性が考えられる。とくに中国側の影響力に関しては2024年に「建中通宝」(780⁴⁾～783)がシャフリスタン1で採集されているほか、2023年にはAKB-8区から11世紀前後と推測される青磁碗片が出土するなど、唐支配以降も交易都市として中国および中国周辺との交流関係が維持されていたことを物語っている。

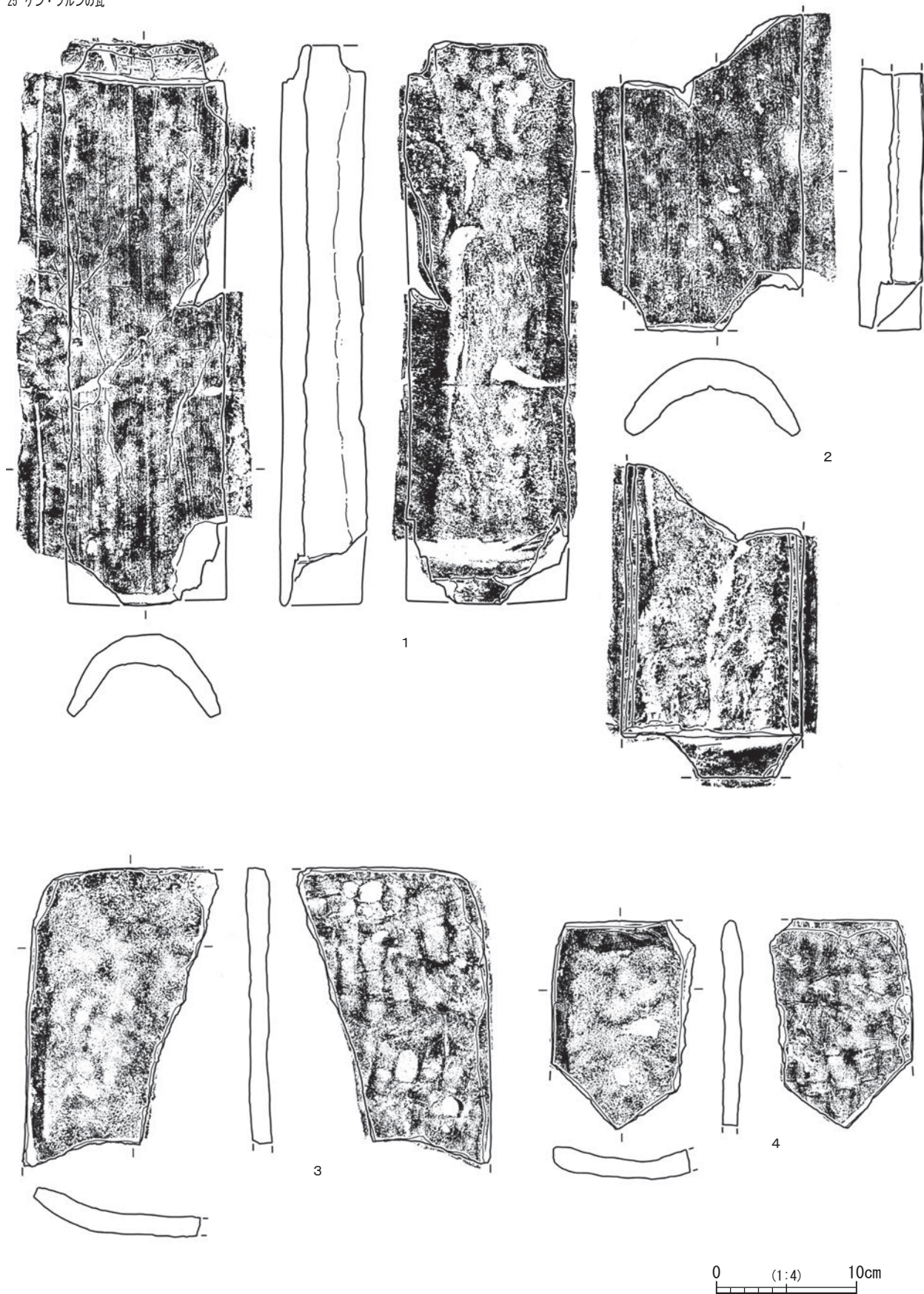
V. ケン・ブルン遺跡の瓦

ケン・ブルン遺跡はアク・ベシム遺跡の北、8.1kmに存在する都市遺跡である。2019年に大規模な土取りによって遺跡の一部が破壊され、その際に回収された遺物の中に丸瓦、平瓦がいくつか確認されたため、一部資料を図化して報告した(櫛原2022)。

ケン・ブルン遺跡の瓦(第6図25-1～4)は丸瓦と平瓦で、いずれも色調が黒灰～灰色の還元焰焼成である。丸瓦(1・2)は1枚作りで、上端側に玉縁状段差、下端側凹面に玉縁を受けるための段差があり、ともに鋭いヘラ(刃物)で削出する特徴をもつ。報告では13世紀代の瓦と推測したが、あらためてシャフリスタン2の赤瓦と比較すると、玉縁の形状が玉縁状段差をもつ丸Ⅲ類に近く、端部に接続構造を失う丸Ⅳ類以前と考えることができる。したがって、シャフリスタン2の瓦の変遷案に照らすと4期と6期の間、5期の10世紀代に位置付けることが可能であり、ここでは仮に10世紀代と推測しておく。また平瓦(3・4)は1枚作りで、凹面には離れ砂を散布し、凸面に特徴的なナデを加え、側面はヘラ削り調整を行うことから、平Ⅱ類より新しく、平Ⅲ類より古く位置づけられる。したがって丸瓦同様に10世紀代とする。これらの平瓦、丸瓦はいずれも独特な特徴をもつことから「ケン・ブルン型瓦」と仮称するとともに、ケン・ブルン遺跡に10世紀代の仏教寺院が存在することから、アク・ベシム遺跡とともに10世紀代に仏教寺院を併設した主要都市の一例といえる⁵⁾。

9世紀以降、大雲寺の瓦がすべて赤瓦であるのに対し、10世紀代のケン・ブルン遺跡の瓦は灰色の還

25 ケン・ブルンの瓦



第6図 ケン・ブルン遺跡の瓦

元焰焼成であり、また推定大雲寺の瓦とは異なる細部の特徴を有している。したがって遺跡単位で瓦の製作、焼成技法に違いがあるとみられ、同じ地域圏にありながら一律でなかった点が興味深い。なお、クジエムヤコの報告には、軒丸Ⅱ類、滴水瓦とともに玉縁状段差をもつ丸瓦が図示されており（第5図24-3・4）、ケン・ブルン遺跡の丸瓦と同じ特徴を見ることができる。それらについては、以前、ケン・ブルン遺跡出土ではないかと推定したが（櫛原2022）、図版中の滴水瓦や唐代の軒丸瓦とともにシャフリスタン2出土の可能性が高く、今後の調査をまって「ケン・ブルン型瓦」を位置づけていきたい。

おわりに

アク・ベシム遺跡の各遺構の変遷を考えるさいに、シャフリスタン2では土器編年と並んで瓦の編年が基本的な時間軸であり、とくに推定大雲寺の設置とその後の変遷を考えるとき、瓦編年の整備は急務といえる。碎葉鎮における大雲寺設置を契機として、チュー川流域における中国の影響下での仏教寺院の展開が指摘でき、ケン・ブルン遺跡から出土した瓦についても、そうした観点での評価が可能かと思われる。

本論考では679年前後の碎葉鎮の創設と692年以降の中興および大雲寺設置、その後の修築・維持の状況を軒丸Ⅰ類、Ⅱ類の有無や出土情報から検討したところ、碎葉鎮が679年に構築され、692年以降に大雲寺が設置されたとする年代観と、瓦の変遷観、出土地点の間に現時点で整合性があり、大きな矛盾はないといえる。したがって648年にさかのぼる時点での安西四鎮のひとつとしての前身都城の存在はなかったと考える。また大雲寺の前身寺院については、軒丸Ⅰ類がAKB-21区で出土するかどうか、今後の調査を経て判断されることになると思うが、現時点では軒丸Ⅰ類が未発見である。したがって692年をさかのぼる前身寺院はなく、692～705年までの武周期に創建された寺院と考えておく。

今後の課題としては、四弁複弁蓮華文軒丸瓦の時期確定、および七弁蓮華文軒丸瓦が大雲寺段階で導入されたとする説の検証、赤瓦における円筒作りから成形台作りへの移行の契機とその時期、滴水瓦の導入時期や系譜などの実態解明等があげられる。これらは今後のAKB-21区の調査の進展で明らかにし

たいと考える。

本文は2025年1月25・26日開催の「シルクロード学研究会（2025）冬」での報告「アク・ベシム遺跡の瓦と大雲寺」をもとに執筆したもので、本稿掲載の瓦の図は報告書（帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2020、同2021、同2022、同2024）、および現在整理中の2024年度資料より抽出した。本稿は山内和也所長の勧めで執筆したもので、向井佑介氏（京都大学）、岩井俊平氏（龍谷大学）にはご教示、ご指摘をいただき、文末ではあるが感謝申し上げたい。

なお本研究は、日本学術振興会・科学研究費補助金・基盤研究（S）「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷－農耕都市空間と遊牧民世界の共存－」（代表：山内和也、課題番号21H04984）の成果の一部である。

註

- 1) 『旧唐書』に碎葉鎮城は王方翼によってわずか50日で造営され、城壁は12門をもつことなどが記されていることから、加藤久祚は王方翼が「五角形の防壁を増築したことをさしている」と解釈し（加藤1997）、また城倉正祥もまた「ラバトの外城壁」建設を示すものとして「複弁蓮華紋」の瓦を王方翼の679年の修築段階に伴うものとみる（城倉2021）。679年以前に前身施設が存在したのかどうか、また築城がどの範囲で行われたものか見解が分かれている。
- 2) シャフリスタン2が碎葉鎮であることを決定的にした資料である「杜懷宝碑」について、ヌルラン・ケンジェアメフトは「1982年、現地の水官がスヤブの羅城のベルンシュタム仏寺遺跡」〔推定大雲寺跡〕で発見したもので、現在はビシュケクのスラブ大学に展示されている。また1987年には現地住民が石を発見し、杜懷宝碑と一体をなすものと推測されているが、詳細は不明である。その後も場所は不明ながら「赤色の花崗岩質に彫られ」た「二龍蟠交様式」の碑額が発見され、現在プラナ博物館に所蔵されている（ケンジェアメフト2009）。このなかで杜懷宝碑は内藤みどりによれば、682年に製作されたものであり、奉納されたのが690年建立の大雲寺とみなすことには矛盾がある点を指摘する（内藤1997）。斎藤茂雄もまた、遅くとも684年までに奉納されたとみる（斎藤2024）。したがって、杜懷宝碑の発見地が確かであれば、大雲寺以前に前身寺院が存在した可能性が高く、679年の碎葉鎮建設時に付属寺院が建てられた、あるいは寺院に相当するような施設があったとみることができるとする。
- 3) これまでⅠ類を七弁蓮華文、Ⅱ類を四弁複弁蓮華文としてきたが、城倉（2021）の指摘により古い順に並べ替え

た。ただし、各型式の細別番号は、その前後関係が必ずしも明らかでないため、任意設定となっている。

- 4) キルギス共和国のコイン研究者A.カミシエフによれば、アク・ベシム遺跡が所在するチュー川流域では、8世紀後半以降の中国銭として「乾元重寶」（758～759）、「大暦元寶」（762～779）が発見されている。また建中元寶は中国本土ではさわめて稀であるが、東トルキスタンでは広まっており、クラスナヤ・レーチカ、アク・ベシムでは計18枚見ついているという（kamsyev.2025）。
- 5) ケンジェアメフト（2009）は中央アジアでの仏教について、「10世紀に東トルキスタンのソグド人、ウイグル人、中国人の間で再び勢力を得るが、セミレチエでは10世紀中頃、カラハン朝のイスラム教受容とともに仏教はすたれた」と記している。

〔引用参考文献〕

- 柿沼陽平 2017「第2回シルクロード学術調査報告会資料」
 加藤九祚 1997「中央アジア北部の仏教遺跡の研究」『シルクロード学研究』Vol.4
 何歳利・龔国強・李春林 2010「唐大明宮太液池出土瓦磚の基礎的研究」『古代東アジアの造瓦技術』奈良文化財研究所
 川崎建三・山内和也 2020「ベルンシュタムによるアク・ベシム遺跡シャフリスタン2の発掘調査—1939年、1940年—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第19集
 櫛原功一 2022「キルギス共和国ケン・ブルン遺跡の瓦に関する一考察」『帝京大学文化財研究所研究報告』21
 櫛原功一 2025「アク・ベシム遺跡の瓦と大雲寺」『シルク

ロード学研究会 2025 冬 資料集』

- 斎藤茂雄 2024「アク・ベシム遺跡出土「杜懷寶碑」再読—大雲寺との関わりをめぐる—」『帝京大学文化財研究所研究報告』第22集
 城倉正祥 2021『唐代都城の空間構造とその展開』早稲田大学東アジア都城・シルクロード考古学研究所 調査研究報告 第5冊
 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2020『アク・ベシム（スイヤブ）2019』
 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2021『アク・ベシム（スイヤブ）2018』
 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2022『アク・ベシム（スイヤブ）2016・2017』
 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー 2024『アク・ベシム（スイヤブ）2022・2023』
 内藤みどり 1997「アクベシム発見の杜懷寶碑について」『シルクロード学研究』Vol.4
 ヌルラン・ケンジェアメフト 2009「スヤブ考古—唐代東西文化交流—」『イリ河歴史地理論集』松香堂
 Kamsyhev.A.（山内和也・吉田豊・斎藤茂雄・藤澤明 訳）2025「中世初期におけるセミレチエのコイン キルギズスタンにおける貨幣経済の始まり」『シルクロードのコイン2』帝京大学出版会
 Bernshtam.A.H.Materialy i issledovaniya po SSSR, NO14, 1950, Moskva-Lenigrad.
 Kozhemyako,P.N.Rannesrednevekovyye gaora i poseleniya Chuyskoy doliny.1959, Furunze.

1期	碎葉鎮創建期 679年前後	軒丸Ⅰ (2号基壇建物)	
2期	碎葉鎮中興期 (武周期) 692～705年	軒丸Ⅱ 軒平Ⅰ 軒丸Ⅲ 軒平Ⅱ 丸Ⅰ 平Ⅰ	
3期	碎葉鎮改修期 706～719年	軒丸Ⅳ 軒丸Ⅲ 軒丸Ⅱ 軒丸Ⅰ	
4期	～9世紀	丸Ⅱ 平Ⅱ	
5期	10世紀	丸Ⅲ 平Ⅲ (ケン・ブルン型瓦)	
6期	11世紀	滴水瓦 丸Ⅳ 平Ⅳ	

第7図 アク・ベシム遺跡シャフリスタン2の瓦の変遷